

「ウディ・アレンの夢と犯罪」★★★★

2 0 1 0（平成 2 2）年 2 月 1 7 日鑑賞
賞＜角川映画試写室＞

脚本・監督：ウディ・アレン
イアン（長男）／ユアン・マクレガー
テリー（イアンの弟）／コリン・ファレル
アンジェラ（若い女優）／ヘイリー・アトウェル
ケイト（テリーの恋人）／サリー・ホーキンス
ハワード（伯父、一族きっての成功者）／トム・ウィルキンソン
マーティン・バーン（ハワードの元同僚）／フィル・デイヴィス
イアンとテリーの父親／ジョン・ベンフィールド
イアンとテリーの母親／クレア・ヒギンス
2 0 0 7 年・イギリス映画・1 0 8 分
配給／アルバトロス・フィルム

＜映画に登場する兄弟はいつも対照的！＞

兄弟の確執や憎しみをテーマとした映画は、ジェームス・ディーンの『エデンの東』（5 5 年）やオダギリジョーと香川照之が共演した『ゆれる』（0 6 年）など。逆に兄弟の愛や絆をテーマとした映画は、スウェーデンの女性監督スサンネ・ピアの『ある愛の風景』（0 4 年）や、韓国映画の『ブラザーフッド』（0 4 年）、『光州 5・1 8』（0 7 年）など数多い。しかしてウディ・アレン監督が本作で描くのは、切れ者の長男イアン（ユアン・マクレガー）と、それほどでもない次男テリー（コリン・ファレル）の強い絆が、いつの間にか憎しみに変わっていき、やがて大変な悲劇にという、愛憎うずまく人間ドラマ。

ところで、どの映画を観ても映画に登場する兄弟は対照的だが、本作の主人公たる 2 人の兄弟は？ 2 人の父親は小さなレストランを営む労働者階級だが、兄イアンはその手伝いをしながらホテル事業等への投資に意欲を見せ、着々とその準備を整えている野心型。それに対し自動車修理工の弟テリーは、手を油に染める仕事を嫌がることもなく、酒とギャンブルを愛しながら恋人ケイト（サリー・ホーキンス）との安穩な生活を送る現状満足型。2 人の仲は決して悪くないようだが、ウディ・アレン監督にかかると、そんな 2 人が否応なく夢と犯罪の世界に招き入れられることに・・・。

＜原題の『CASSANDRA’S DREAM』もオツなもの・・・＞

本作は日本の観客にわかりやすくするため、またウディ・アレン監督作であることを強調するため『ウディ・アレンの夢と犯罪』という邦題にしているが、原題は『CASSANDRA’S DREAM』という、オツなもの。なぜそんな原題にしたのかは、映画冒頭にイアンがなければの貯金をはたいたうえ借金を覚悟したり、テリーがドッグレースで頑張って稼いだ賞金で共同して小型のクルーザー“カサンドラズ・ドリーム号”を購入する姿をみればよくわかる。このクルーザーが 6 0 0 0 ポンド（2 0 0 7 年 7 月の高値で約 1 5 0 万円、2 0 0 8 年 1 0 月の安値で約 8 5 万円）と格安なのは前の所有者が死亡したためだが、前向きの 2 人はそんな縁起の悪いことは全く気にせず、購入したばかりのカサンドラズ・ドリーム号で意気揚々と初船出に。しかも、初船出の帰り道にイアンは運命の女性とも言える若い女優アンジェラ（ヘイリー・アトウェル）と出会うことになったから、カサンドラズ・ドリーム号がもたらす夢は拡大するばかりだ。アンジェラは上昇志向の強い女性だったが、イアンのハッタリ気味のアプローチ（？）が功を奏したのか次第に心を開き、遂に 2 人は結ばれることに。

このままイアンとアンジェラの恋が成就し、博打好きのテリーの勝負もビシビシ決まれば前途は洋々だが、邦題からわかるとおり、そんな 2 人の将来が犯罪に繋がり、カサンドラズ・ドリーム号は悲劇の象徴になっていくことになるのだが、それは一体なぜ？

＜殺人って、意外と身近？意外と簡単？＞

問題の発端は借金から。ドッグレースやポーカーなどの賭け事でいつまでも勝ち続けることができないのは当然だが、それがわからないバカが時々いるもの。その典型がテリーだ。テリーを演ずるコリン・ファレルは、『ニュー・ワールド』（0 5 年）、『マイアミ・バイス』（0 6 年）、『Dr. パルナサスの鏡』（0 9 年）などに出演している二枚目俳優。ところが、そんな彼が本作ではそのカッコ良さを封印し、人はいいいけれども優柔不断で何かとグチっぽい中途半端な弟役を見事に演じている。それに対して、『ムーラン・ルージュ』（0 1 年）、『アイランド』（0 5 年）、『天使と悪魔』（0 9 年）などに出演しているユアン・マクレガーは、あくまで理知的かつ冷静で、時には冷徹な判断を下す兄役を見事に演じている。

借金清算のために殺人を？ そんな話が降って湧いたのは、一族きっての成功者である伯父のハワード（トム・ウィルキンソン）から、ある事情でマーティン・バーン（フィル・デイヴィス）という男の殺害を頼まれたため。それに対する対応が兄弟で対照的になったのは当然だが、本作が描く①イアンの決断、②イアンからテリーへの説得、③テリーの納得、そして④殺人の実行という流れをみると、殺人って意外と身近に？そして意外と簡単？

＜完全犯罪と思ったが・・・＞

完全犯罪と思ったのに、思わぬところに落とし穴。そんな映画のベスト 1 はルネ・クレマン監督、アラン・ドロンの主演『太陽がいっぱい』（6 0 年）だが、本作においても手づくりのピストルによるマーティン・バーン殺害は完全犯罪？他方、ドストエフスキーの『罪と罰』を読めばわかるように、人間はどこかに罪の意識を持っているもの。そしてそれが強い人間と弱い人間がいるのは当然だが、間の悪いことにテリーはそれが強い人間だったようだ。私自身はきっとイアンのタイプだと思うので、せっかく殺人に成功したのなら後は黙っていればいいだけ、とすぐに納得しそうだが、テリーのようなタイプはそれができないらしい。

外部の誰からも何も言われないのに、自ら恋人の前で殺人の罪に苦悩する姿をみせつけば、少しずつ破綻が生じてくるのは当たり前。冷静なイアンは、医者相談に行くと言いかけたテリーを何とか説得し、2 人だけの話し合いによる封じ込め解決を狙ったが・・・。

＜ウディ・アレン監督流の意外な結末に注目！＞

ウディ・アレン監督はアカデミー賞脚本賞に 1 4 回もノミネートされていることからわかるように、ストーリー展開の面白さは抜群。本作は『マッチポイント』（0 5 年）、『タロットカード殺人事件』（0 6 年）から続く「ロンドン 3 部作」の最終章だが、日本では 2 0 0 8 年の『それでも恋するバルセロナ』が先に公開されている。それはきっと『それでも恋するバルセロナ』における、スカーレット・ヨハンソンとペネロペ・クルスという 2 大女優の共演が目立っていたため？それに比べると、本作で映画界への第一歩を踏み出したアンジェラ役のヘイリー・アトウェルは無名だが結構な美人。本作におけるアンジェラの登場やアンジェラとイアンとの恋の成就是、イアンが出世街道をひた走る姿を強調するためだが、ウディ・アレン監督はそんなイアンの落とし穴を見事に準備した。

不眠症を医者相談に行くどころか、今や警察への自首さえ真剣に口にするテリーをみて、イアンが困り切ったのは当然。そうなればさらにイアンが伯父のハワードにも相談しなければならなくなったのも当然だが、そんな中で導き出されたある方針とは？ 2 人の女たちの思惑を大きく超えた中で 2 人の兄弟たちの葛藤が行き着く先は？えっ、こんなシーンで映像が途切れるの？と一瞬戸惑うような終わり方もウディ・アレン監督独特の計算？そんなウディ・アレン監督流の意外な結末に注目！